

中学校

- 1 主題名 かけがえのない生命 指導内容 3-(2)
- 2 資料名 生き抜くんだ(自作資料)
- 3 指導について

本資料は北アルプスで事故に遭い、奇跡の生還を果たした奈良の登山愛好家である荒井さんの手記を基に構成したものである。荒井さんは、雪山での事故という極限状況に陥りながら、「生き抜いてみせる」という強い意志をもち、山岳救助隊に助けられるまでもちこたえ、無事に生還した。死に直面したとき、荒井さんは、生きることをあきらめず生き延びるために精一杯頑張った。そのとき荒井さんを支えたのは、自分を心配して待っていてくれる家族や仲間への思いであった。

私たちは互いに支え合って生き、生かされている。しかし、このことは、日常の生活の中でつい忘れがちである。生命が多くの人々に支えられて生かされていることを共に確認し合うことを通して、自他の生命を尊重し、自分に与えられた生命を強く生き抜こうとする心情を高めたい。

4 ねらい

生き抜くことに強い意志をもち、無事生還を果たした荒井さんの姿を通して、自他の生命が多くの人たちの支えによって生かされていることに感謝し、たった一つの生命を大切にしようとする気持ちを育てる。

5 展開

	学習活動	主な発問と予想される児童の意識	指導上の留意点	備考
導 入	1 「奇跡の生還」について情報を出し合う。	○ 生死の間をさまよって奇跡的に生還した話を聞いたことがありますか。	・新聞やテレビで伝えられたものを思い出して出し合えるようにする。	
	2 資料を読んで考える。	○ 一日目の夜、荒井さんはどんなことを思っていたでしょう。 ・ どうしよう。どうなるのだろう。 ・ 助けに来てくれるだろうか。 ・ 今ごろみんなは心配しているだろうな。 ・ あのときもっと気をつけたらよかった。 ・ 家族の言うことを聞いて、今回はやめておけばよかった。 ○ 二日目、荒井さんが(このまま死んでいけたら楽だろうな)と思ったのはなぜだろう。 ・ 睡魔に勝てない。 ・ もう体力が 限界にきていた。 ・ できる限りのことはしたが、もう無理だとあきらめた。 ◎ 荒井さんが「奇跡の生還」を果たすことができたのはなぜでしょう。 ・ 運がよかったから。 ・ 最後まであきらめなかったから。	・ 不安と恐怖の中で自分なら何を考えるかと問い返すことで、後悔や反省、心配や希望など様々な思いが交錯している主人公の気持ちに共感できるようにする。 ・ 体力的に限界がきている状況の中で、生きることをあきらめかけるという弱さが出たことを理解できるようにする。 ・ 荒井さんが奇跡的に生還できたのは単に運がよかっただけではなく、生き抜こう	雪山の写真展 ワークシート

	<p>3 自分を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 救助隊の人のお陰。 • 何としても生き抜こうと強く思っていたから。 • 的確な判断をして対処したから。 • 家族や仲間が待ってくれているという思いがあったから。 • 家族や仲間にもう一度会いたいと思う気持ちが荒井さんを奮い立たせたから。 <p>○ 荒井さんは「これからどう返していけばいいかと考えています」と言っているが、どう返していったと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分も何か人を助けられるようなこと（ボランティア）をしている。 • 自分の体験を伝えて、山の危険を知らせている。 • 今まで以上に生命を大切に生きています。 <p>○ あなたは今生きています。今のあなたを支えているものは何でしょう。また逆にあなたが支えていると思うものは何でしょう。</p> <p>(あなたを支えているもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 家族。友達。先生。ペット。 • 夢を実現させたいという気持ち。 <p>(あなたが支えているもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 友達。家族。 	<p>とする強い意志やその意志を支えた家族や仲間の存在、命がけて助けてくれた救助隊など多くの人の支えがあったことを考えられるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 荒井さんが自分の生命が自分だけのものではなく、多くの支えによって生かされたものであると感じていることを再確認する。 • 普段何気なく過ごしているが、夢や希望が生きる力になっていることやお互いが生きるために支え合っていることに気付けるようにする。 	
<p>終末</p>	<p>4 ゲストティーチャーの話を聞く。</p>	<p>○ 日々生命と向き合っておられる救急救命士の方から生命について話していただきます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 生命についての思いを温め合えるようにする。 	<p>ゲストティーチャー</p>

6 中学校第2学年での実践から

【荒井さんが「奇跡の生還」を果たすことができたのはなぜでしょう。】

- 運がよかったから。
- 雪の中に埋もれていた荒井さんを山岳救助隊が発見してくれたから。
- 救助隊が来てくれる（見つけてくれる）と信じて待っていたから。
- 強い精神力で眠らなかったから。
- 生還する希望を捨てなかったから。あきらめなかったから。
- 心の中に支えになるものがあったから。
- 自分のために今まで色々してくれてくれた人や心配してくれてくれた家族のことが思い出され、申し訳ないと思った。その人たちの顔が思い浮かんできたから励まされて、眠るのをこらえたから生きられた。
- やっぱり、一人だけ山の中に残されたら不安になるし、あきらめると思う。でも、自分には心配してくれる家族や仲間がいると思ったら元気になるし、頑張ろうと思うんじゃないかなあと思う。
- 家族や仲間のためにも、ここで死んだらいけないと思ったから。
- 心配して反対してくれた人もいるのに、それを押し切って来た自分が死んでしまったら、申し訳ないというか、自分が死んだら悲しむ人もいると思ったから。
- 今死んでしまったらすべてが終わりになってしまうと思ったから。

【あなたは今、生きています。今のあなたを支えているものは何でしょう。また逆に、あなたが支えていると思うものは何でしょう。】

(あなたを支えているもの)

- 家族や友達。 • 家族もだけど友達がいなかったら生きていけないと思う。
- 私の身の回りにいる人に支えられていると思う。 • 食べ物、電気、生活のすべて。
- ペットの猫。愛犬。 • 好きな歌手。尊敬してる人。 • 本、ポエム、音楽。 • 将来の夢。

(あなたが支えているもの)

- 家族。 • 友達。落ち込んでいるときや苦しいとき、支えられると思う。
- 自分では分からないが「だれか」を支えていると思う。 • ペット。

中心発問で「荒井さんが無事生還を果たせたのはなぜか」を考えさせると生徒たちは多くの理由を考えることができた。自分も同じ状況になったら何を思うかと問うと、「家族や仲間（友達）」という言葉が多くの生徒から返ってきた。多くの幸運が重なって荒井さんは一命をとりとめたのであるが、周りの支えがなかったら助からなかったであろうことを実感できていたと思われる。さらに、「家族のことを考えて生き抜くんだという希望を捨てなかった」のは家族が自分の支えとなったのであると同時に、「家族を悲しませるので家族のためにも死ぬわけにはいかない」と思うのは自分自身が家族を支えていることでもある。ここで、互いに支え合っていることに気付かせることができる。

また、自分を振り返って自分を支えているもの、自分が支えているものを考える際にも「どんなときにそう感じたか」を具体的に振り返らせると、自分のこととして、より深く実感できるであろう。

互いの意見を交流し合い、自分の生命が様々な人に支えられているだけではなく、自分もまただれかを支えているという意識を温め合いたい。

終末は、救急救命士のほかに看護師や医師など生命と向き合っておられる方をゲストティーチャーとし

て迎えるのも効果的である。それが難しいときは、事前にビデオに収録したものを見せたり、教員が、一人の親として、我が子に対する思いを話して聞かせたりすることもできる。

7 生命尊重にかかわるその他の資料

「ミハイルの夢」	文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き） 3
「牛のお産」	文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き） 3
「たとえぼくに明日はなくとも」	文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き） 3
「へその緒」	文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き） 3
「生きがいを求めて」	文部省 道徳教育推進指導資料（指導の手引き） 3
「私も必要とされて生まれてきた」	奈良県教育委員会 中学校特別活動番組「中学生時代」
「今、ここにある命を」	奈良県道徳実践活動学習教材「響き合う心」中学校編

生や死の問題について考える体験を促す工夫……

—略— 生や死の問題について考える体験を促す工夫を各学校にお願いしたい。これからの高齢社会を展望すると、老いや死について考え、思いやりやいたわり、生命の大切さ、限りある人生をいかに生きるかなどについて考える契機として、高齢者福祉施設や病院を訪れ、介護活動を自分の目で見、体験することなどは大いに意義がある。人々の死を看取るホスピス関係者、医師や看護婦などから、直接話を聞く機会を設けることも考えられてよいだろう。また、新生児の誕生に立ち会ったり、乳幼児に触れる経験の乏しい今日の子どもたちが、幼稚園、保育所、保健所、乳児院等を訪れることも、思いやりや生命の尊さを学ぶ貴重な機会となる。

「新しい時代を拓く心を育てるために」—次世代を育てる心を失う危機—

（中央教育審議会（答申）平成10年6月30日）



生き抜くんだ

(眠い……。眠りたい……。このまま眠って死んでいけたらどんなに楽だろう……。)

少し体を動かすと心臓が激しく脈打ち、もう体力がなくなりかけていることがはっきり分かった。

一九九二年五月二日、荒井さんは趣味の山登りのために奈良の登山クラブの仲間十一名と北アルプスに来ていた。天気は快晴。五月とはいえ、山々は真っ白な雪で覆われている。ビデオカメラを回し、春山の景色を楽しみながら登っていた。

ところが、途中から少しずつ風が強くなりだした。そして、山頂に続く急坂にさしかかったころには猛烈な突風が吹き出し、目も開けていられない状態になっていた。全員が杖を外し、四つんばいになって進む。

あと五分もすれば頂上。やれやれと思いながら、グループのサブリーダーである荒井さんは、後ろの仲間は大丈夫かと振り返った。その瞬間、荒井さんは突風にあおられてどんとしりもちをついたかと思うと、起き上がる間もなくそのまま急斜面をすべり出した。

(しまった！)

途中で何回転もしながら、まるで石ころのように転がり落ちていく。このままどこかに激突すれば間違はなく命はない。それは、永遠に続くかと思われる恐怖の時間であった。

幸い少しずつスピードが落ち、やがて坂の途中で止まった。しかし、登山道からははるか下の急斜面。おまけに、肩や足を打撲で痛め、体を動かすこともままならない。

(自力で下山するのは不可能だ……。救助が来るまでここで待つしかない……。)

荒井さんは、途方に暮れていた。

やがて夜になった。真っ暗やみの上に寒さが一段と増してくる。荒井さんは、吹きだまりになっている岩陰を見つけ、そこに穴を掘って体を横たえていた。

(今ごろ、山小屋では大騒ぎになっているだろう。どうしてもっと慎重に登らなかったのか。家族はどんなに心配しているだろう。そして何より、自分はどうなってしまうのだろうか。)

いろいろな思いが頭の中をぐるぐるとかけめぐる。絶対に眠ってはならないと分かっているながら、疲れ切っていた荒井さんは眠り込んでしまった。

翌朝、目を覚ました荒井さんは目を疑った。一メートル先も分からぬくらいの猛吹雪で、口の下まで雪に埋まってしまっていた。今日は絶対に救助が期待できないと分かった。



荒井さんが事故にあった北アルプス天井岳

(もしこれが明日も続けば……。)

そう思うと不安で不安で、思わず大声を上げていた。しばらくの間ぼう然としていたが、気を取り直して、とにかく生き延びるためにやれるだけのことはやってみようと心に誓ちかかった。

食料を取り出さずとして、がく然とした。いくら探しても見当たらない。おそらく雪の下で凍り付いてしまっているのだろう。リュックの中に残しておいた弁当も、かちんかちんに凍ってとても食べられない。せめて水をと思い水管を開けようとする、中で凍りついてどうしてもふたが開かない。水と食料だけはしばらくの間もつだろうと思っていた荒井さんは、絶望感と恐怖感でいっぱいになった。容赦なく吹雪は強く吹きつけてくる。まづげが凍り、顔にもつららが張ってきた。時間がたつにつれ、どんどん体力が消耗していく。

そしてまた、つらく凍える夜がやってきた。少し動いても心臓は激しく脈打ち、指先はもうまったく感覚がなくなっている。息をすることさえ苦しくなり始めた。そんな疲れ切った体にすさまじいほどの眠気が襲いかかる。しかし、今夜眠ってしまえば、もうそれきりだろう。

(もう十分がんばった……。眠い……。眠りたい。このまま眠って死んでいけたら楽だろうな……。)

とうとう、荒井さんが深い眠りに落ちていこうとしたときであった。

荒井さんの脳裏に、家族や奈良の山登りの仲間たちの顔が浮かんできた。

実は今回の登山は、家族から反対されていたのであった。以前に痛めていたひざが前日からまた痛み出し、体調もあまりよくはなかった。無理せず下山して、二日後にみんなと合流すればどうかと言われていたのである。あんなに家族や仲間たちが自分のことを心配してくれていたのに……。

(死ねない。ここで死ぬわけにはいかない……。)

荒井さんは、じっと耐え続けた。弱っていく心臓を、手袋でぶくろ(が)がばりばりに凍った両手でマッサージしながら……。

次の日、雪の中に埋もれて息も絶え絶えの荒井さんを山岳救助隊が発見した。

急斜面を隊員に背負われ五十メートルほど登った後、ヘリコプターにつり上げられて山から下ろされた荒井さんは、今度は待ちかまえていた救急車に乗せられ、酸素吸入を受けながら病院に運ばれた。荒井さんは、無事、生還することができたのである。

荒井さんは、このときのことを後に振り返ってこう語っている。

「一度はあきらめかけた生命でした。全身の感覚がなくなり、すさまじい眠気が襲ってきたとき、家族や山の仲間の顔が浮かんできたのです。死ねない、死んではいけないと思いました。

さらに、救助されたときには、隊員の方が七十キロ近い私の体を背負ってくれ、思い切り励ましてくれました。

多くの人たちが、私のことを思ってくださっていたのです。この恩は一生忘れないと思います。そして、これからそれをどうして返していけばいいかと考えています。」



北アルプスを背に立つ荒井さん